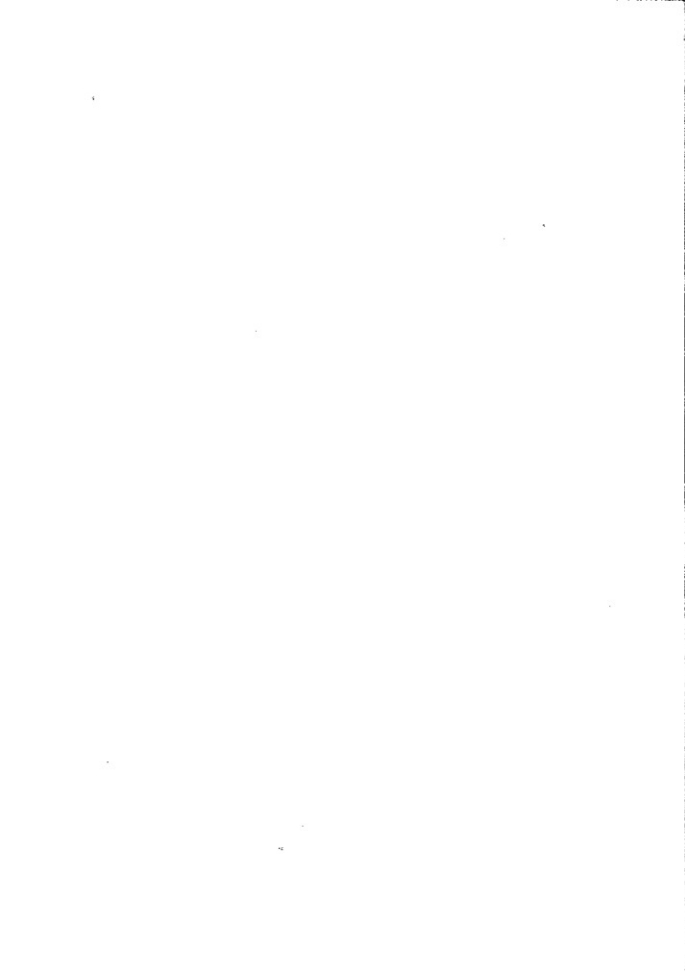




圖版51 出土土器(平安時代)



復元にあたって

先史時代の家屋の構造上の原理についてであるが、木造建築の基本は三脚式構造にある。

その発達段階において四脚・五脚及び多脚となり、柱や桁が用いられるようになり、一般的な四柱式の家屋が造られたと考えられる。また、棟の発達に伴い挿木は放射状または直交する様に整えながら今日の茅葺農家の屋根に見られる構造となったものと考えられる。そこで棟がどうであったかという問題がでてくる。一つには一箇所に結束した傘状構造が考えられる。かつて国学院大学教授樋口清之氏が東京都代々木八幡神社境内の遺跡に復元された縄文式の住宅の復元には、屋根の傾斜面に煙出しをつけた構造の屋根形式を採用している。これは今日民家の煙出しが破風ではなく屋根の横側が棟の中間につけられたのを見受けるが、そうした方法を取り入れた様にも考えられるが、なんとなく奇異に感じられる。また、最近土地改良工事の現場などで、冬場の休憩所に「ナル」を数本傘状に立て数メートルの上方で結束し、それに天幕を巻き付けた小屋を見受けるが、この小屋の中で火をたくと煙は見事に結束した所より抜け、小屋の中は煙たかないのに驚かされる。こうした屋根構造が短い棟木を渡すことにより、又首が交叉し自然的に破風が出現したのではなかろうか。その後、柱が方形に立てられるようになり、棟木が次第に長くなり又首や転ばしが外方に開くと原始寄棟造りができあがる。縄文時代に入母屋造りと考えられるかどうかは疑問であるが、弥生時代になると高床の倉庫や入母屋造りの家が始まったのではないかと見られる。古墳時代になると佐味田の家屋文鏡にみられる如き、いわゆる原始入母屋造り及び寄棟造りの構造であったことが明らかである。それがやがて軒が地上を離れていわゆる切上造りとなるのであろう。また煙出しの方も次第に大きくなり平出遺跡に建てられた土師式住宅の破風のように行って行ったものと考えられる。その外、軒の地上よりの切上りも次第に高くなるにつれ、側壁の開口部も多くなると、煙出しもそれにつれて小さくなり、ついには現代民家の茅葺屋根に見受けられる形式となったものと考えられる。

1 第3号住居址（縄文時代）の復元

縄文時代中期後半に属する第3号住居址の復元を試みてみた。

住居址は長軸が4.3m、短軸が3.7m、東北部が張り出したダルマ形円状の竪穴式である。東南の柱穴は穴の真々で2.1m、南北2.0mで、東西が南北よりわずかではあるが長い。柱穴の大きさは平均で30cm、深さも約30cm内外である。柱を立て梁を渡す設計であるが実際には現場で又木が得られたので又木を使用することにした。梁の上に桁を渡すと、その形は方形の梁組みとなる。東西から平又首を組み、次に隅又首（妻棟木）を二具組み交叉した箇所には棟木を渡す。後は南北妻側に又道と棟木を配す。棟木の端には破風から雨水が吹き込まない程度の外転ばしの破風又首を付ける。これが長く伸び千木の役割を果たす。あとは棟に3本の樋通し木舞いを渡すと小屋組みの主要構造は終わる。屋根は茅葺きとする。

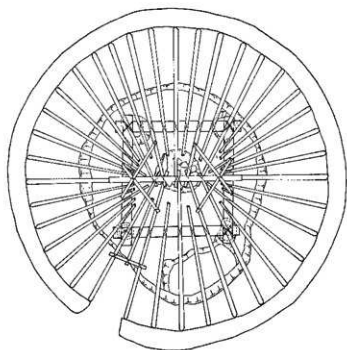


图 1 魏文时代复元住宅平面图

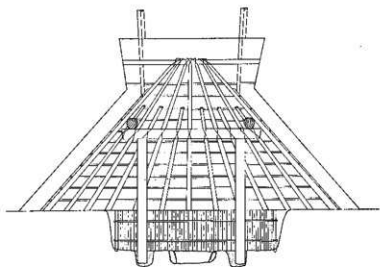


图 2 魏文时代复元住宅横断面图

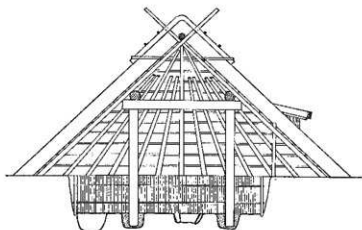


図 3 縄文時代復元住宅横断面図

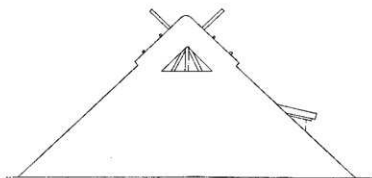


図 4 縄文時代復元住宅要図

入口は検討の末、南東とした。入口の高さは防寒等を考え低めとした。入口左右の柱の上に簡単な稲を入れた小屋根をつけた。

また樺木より吊小柱を下げ床面にあまり差し込まない程度とし、萩の雑木を編んで障壁とした。

材 料

水 工 事

柱	丸	末口	17cm	長さ	2.6m	4本	榑	木	丸	末口	9cm	長さ	2.5m	6本		
桁	"	"	15cm	"	2.6m	2本	飛	貫	丸	"	9cm	"	2.3m	3本		
桁	丸	"	15cm	"	2.5m	2本	屋	根	押	丸	"	"	3m	6本		
又	首	丸	"	9~10cm	"	4.2m	6本	障	壁	材	小	枝	径	0.5cm		
又	首	丸	"	9~10cm	"	5.5m	4本	履	扱	工	事					
又	首	丸	"	9~10cm	"	5.0m	5本	小	舞	末	口	2cm	長さ	2.5m	100本	
入口上梁	丸	"	9cm	"	1.1m	3本	茅							200束		
持持又首	丸	"	9cm	"	1.4m	4本	藤	づ	る					300m		
榑	木	丸	"	"	4.0m	10本	縄							3巻		
							補	足	材	丸	末	口	8cm	長さ	2m	30本

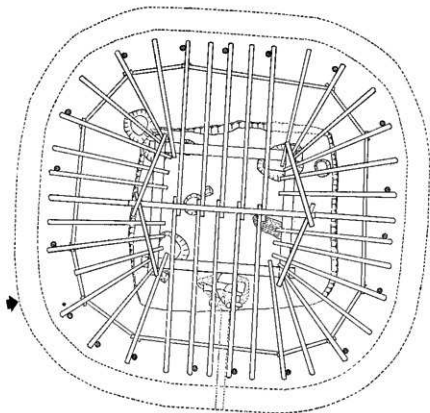


图 5 平安时代復元住宅平面面图

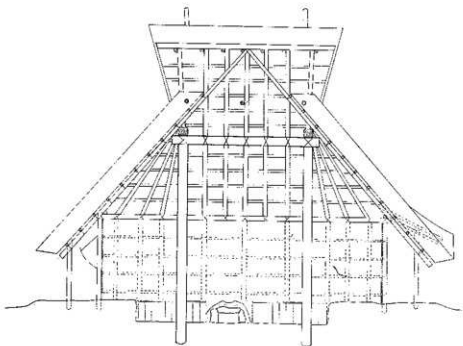


図 6 平安時代復元住宅縦断面図

2 第2号住居址（平安時代）の復元

本遺跡の調査は工場建設に必要な敷地のみの調査にとどまった結果、平安時代集落の様相を把握することができなかったため、集落全体の立場に立つての構想の基に推定復元を試みることはできなく単独の復元となってしまった。

第2号住居址は第1号住居址と同形の隅丸方形の住居址である。本住居址よりは一部茅の炭化物が発見されたのみで、建築に使用された遺物の痕跡を得られなかったため、その資料を参考にすると共に、中央道埋蔵文化財発掘調査などの資料を加え復元を試みた。

資料として母屋桁と思われる12～15cmの角の欠けた角材と径9～12cm内外の丸太材（榎木と考えられる）が折重なって検出されたことと、名称のつけ難い材木や割板の一部と考えられる板材等の資材を確認できたことは復元上重要な基礎的資料となった。

これらの資料を考慮しつつ、小屋組みを推考してみた。

柱の上に桁を渡し四方より平叉首を二具ずつ組み、さらに隅叉首の二具を組む。そうして母屋桁を置き、隅は榎木を扇状に配し小枝の小舞いを渡し茅葺きとする方法が考えられる。

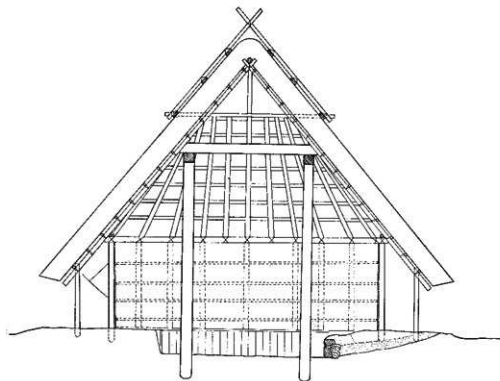


図7 平安時代復元住宅横断面図

本住居址の柱穴は3本である。普通4柱であるべきであるから3柱しか確認できなかったのは、建築上重要なことであるが、このような例は他にも類例が多い。私はおそらく自然木を利用したと考えている。かつて宮坂英三氏も指摘している所である。また床面が黒褐色土層中に設けられているところより、床面及び壁面の施設を知ることははなはだ困難であった。このため壁面の施設は第1号址で発見された割材を用い障壁とした。また平出第3号住居址発見の壁外小穴の如き施設が検出できなかったのは、この土地が相当広い範囲にわたって耕土が削上されたことがあるので、おそらく痕跡があったとしてもその時点で破壊されてしまったものと思われる。今回は平出第3号及び伊那地方発見の壁外施設を参考として支柱を設けることとした。また厩壁と支柱については、「鉄山秘書」に切上造り、つまり軒の切れ上った家屋（犬登造り）、檜木が地上に差し込まれた造りがみえる。すでに縄文、弥生時代の建築にも支柱の存在が見受けられる。

支柱の存在は、切上造りに壁体の発生が生まれ、建築史上重要な問題である。4、5世紀頃の佐味田古墳出土の家屋文鏡には犬登造りと切上造りとが共存している。あるいは二つの形の家があったのかも知れない。このことは現在、発掘史料の不足から急には解決できない問題である。

次に架梁について述べる。柱間は南北2.8m、東西2.5mである。4本の柱上に架梁を渡し、妻又

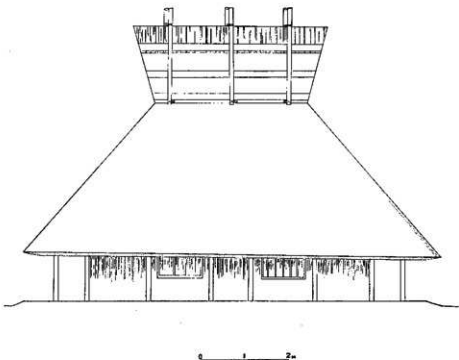


図8 平安時代復元住宅要図

首及び平叉首を渡し、その上に棟木を置く。その他の箇所には柱木を配すると設計図に示す、原始入母屋造りとなる。

屋根の葺き材は茅の炭化物が発見されたところから茅葺きとした。壁は板を用い杉皮を両面に張り、滑小舞いで押えた。万葉集によると草壁があったようであるが、ここでは板壁とした。屋根の葺原は平均30cmとし長く持つように考慮をはらった。入口については痕跡は明らかではなかったが、周囲の状況、風向等検討の上、南東の隅にした。また入口の広さも防寒等を考えて、狭く高さも人がかんで入れる程度とした。

材 料

木工事

柱	丸 径	20×20cm	長さ	4.5m	4本	椽 木 丸 末口	6cm	長さ	4.5m	8本
桁	角	20×20cm	長さ	3.3m	2本	椽 木 丸 末口	6cm	長さ	3.5m	24本
梁	角	20×20cm	長さ	3.0m	2本	聚 貫 丸 末口	10cm	長さ	3.5m	3本
平叉首	丸 末口	6cm	長さ	5.0m	2本	小 舞 丸 末口	3cm	長さ	3.0m	100本
妻叉首	丸 末口	6cm	長さ	6.0m	2本	支 柱 丸 末口	12cm	長さ	2.0m	19本
外転ばし	丸 末口	8cm	長さ	2.0m	4本	母 屋 桁 押角	7×7cm	長さ	3.2m	4本
入口上梁	丸 末口	10cm	長さ	1.6m	1本	壁 板	厚さ1.5cm	長さ	2.5m	62.5m ²
入口柱	丸 末口	10cm	長さ	1.8m	2本	杉 皮				125m ²

障壁割板	5×10cm	長さ	70cm	12m分	襖(すべ襖)	100束
屋根工事					補足材 丸末口	8cm 長さ 3m 40本
押木	丸末口	2cm	長さ	4m	100本	
茅					350束	

注1 実際に復元された建築は、設計図面とやや異なる点があることになったが、これは材料や設計で目のとどかなかった面等に変更したからであり、お許し願いたい。

屋根も現代の職人が当たっているので、現代の民家の如き風情にどうしてもなりがちであったが、できるだけ原始的に施行するように心がけたが、そうした点が多々あることを反省している。材料も永くもたせるため、良材を使用している。これらの点、復元住居を見る方々にご了承願いたいと思う。

注2 復元住居の基となった縄文・平安の2軒の住居址は、工場の建物の位置にあたるため、やむを得ず、現在の位置に移し復元したものであることをご承知願いたい。(友野 良一)

参 考 文 献

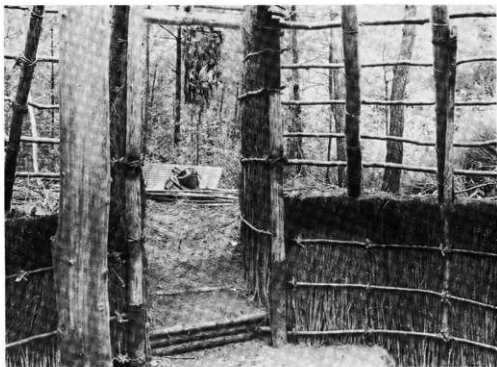
- 1 「登呂」日本考古学協会 昭和29年
- 2 「尖石」茅野市教育委員会 昭和32年
- 3 大場磐雄、友野良一「長野県上伊那郡伊那村遺跡第1次調査概報」信濃3巻—6 昭和26年
- 4 藤島玄治郎、友野良一「長野県上伊那郡伊那村遺跡復原住宅について」信濃3巻—11 昭和26年
- 5 「平出」平出遺跡調査会 昭和30年
- 6 大場磐雄、藤沢宗平、藤島玄治郎「長野県西筑摩郡三店村若宮遺跡調査概報」信濃9巻—3 昭和32年
- 7 「岡屋遺跡」岡屋遺跡保存会 昭和33年
- 8 藤森采一「井戸尻」中央公論社 昭和33年
- 9 八幡一郎「大深山遺跡」信濃12巻—8, 13巻—7 附36, 37年
- 10 「伊那市御殿場遺跡緊急発掘調査概報」伊那路11巻—1 昭和42年
- 11 友野良一「長野県における縄文期復原住宅の現状と問題点」信濃24巻—5 昭和47年



縄文時代復元住宅小屋組 (南面)



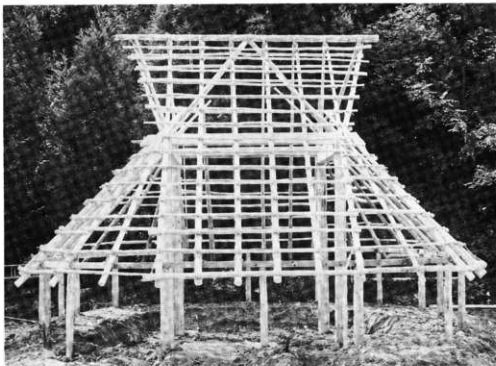
縄文時代復元住宅小屋組 (西面)



縄文時代復元住宅入口と障壁



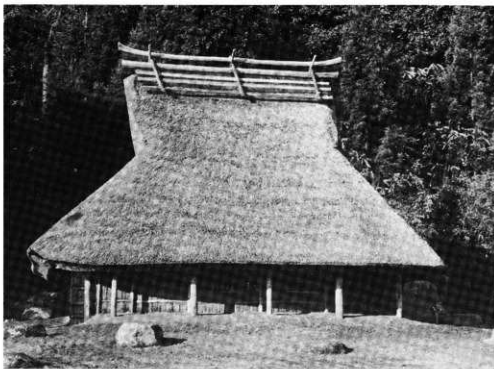
縄文時代復元住宅姿園(東面)



平安時代復元住宅 小壁組



平安時代復元住宅 梁組



平安時代復元住宅 正面



平安時代復元住宅 側面

あ と が き

養命酒製造株式会社駒ヶ根工場が新設された大徳原地籍は、往古から言い伝えもあり、近年になって辻沢考古学研究会が、縄文早期の遺跡地であることを確認してからは、市内でも数少ない縄文早期の遺跡の一つとなったため、工場新設に当たっては遺跡の保存が問題となりました。

しかし幸いにも、養命酒製造株式会社のご理解ある措置によって調査費全額を支出して戴いたほか、積極的にご協力を戴き、記録保存のための調査を行うことができました。

このことは、文化財保護と開発に関心の高まっている折柄、関係方面に深い感銘を与えました。

調査に当たっては、駒ヶ根市教育委員会が直ちに調査会を設け、調査団を編成して約1か月余にわたる緊急発掘調査を行い、報告書に記した通り多人の成果をあげることができました。

いずれもみな会社、駒ヶ根市当局をはじめ、地元の方々、調査員各位のご協力の賜と存じ、心からお礼申し上げる次第であります。

更に調査終了後遺跡保存事業の一環として、縄文中期、平安時代の住宅をそれぞれ一棟を復原して、文化財保護を図って戴いた会社のご英断は、この事業に華を添えてくださったもので、静かな山麓の近代建築に古代建築の美が調和し、その姿は見事であります。

調査が終了してすぐに報告すべきでしたが、会社の理解あるご配慮によりまして、復元された縄文・土師の住宅の報告を併せて収録し、一層充実した報告書を刊行することになりましたので、刊行が当初の予定より遅れ、会社をはじめご関係の皆様にご迷惑をおかけした事をお詫び申し上げます。

この間に、塩沢総社長さん、北沢照可調査会長さんがご他界され、報告書の刊行を見て戴けなかったことは痛恨の極みであります。

ここに際しのご冥福をお祈りいたします。

この報告書を刊行してくださった会社に対しまして、心からお礼を申しあげます。

昭和49年10月25日

養命酒駒ヶ根工場川地内遺跡調査団

養命酒駒ヶ根工場用地内遺跡
—緊急発掘調査報告書—

昭和49年10月20日 印刷

昭和49年10月31日 発行

長野県駒ヶ根市市立博物館内

編集 **養命酒駒ヶ根工場用地内遺跡調査会**

東京都渋谷区南平台町16番25号

発行所 **養命酒製造株式会社**

長野県岡谷市川岸108番地

印刷所 **株式会社中央印刷**

〔非売品〕